

第3回 市町村・公民館等職員専門研修 実施レポート

日時：令和6年10月2日（水） 参加者：32名（うち市町村から26名）

会場：秋田県生涯学習センター 講堂

生涯学習・社会教育関係者、公民館や市民センター等社会教育施設職員に求められる資質や力量を高めることを目的とし、「防災を通じた地域のつながりづくり」というテーマで行いました。

【午前 講義・演習】

前半は、秋田県生涯学習センター社会教育主事の**布施 久典**が『コミュニティ・スクールにおける防災への取組～地域住民との「熟議」を核に～』と題して講話と演習を行いました。ニツ井中学校区で実施した防災に関する取組を例に、コミュニティ・スクール推進と防災学習の親和性について説明しました。演習では、その際に行われた「熟議」を模擬的にを行い、参加者は対話を通して目標を共有することで自分事としての意識が高まり、それぞれの立場で取り組めることを確認しました。



後半は、秋田県生涯学習センター社会教育主事補の**和泉 洋介**が「日常から考える災害情報の活用」と題して講話と演習を行いました。日頃から災害情報を得る手段を知っていることにより、いざというときの防災行動につながる可能性が高まることについて説明しました。演習では、参加者自身のスマートフォンを利用し、秋田県防災ポータルサイトや気象庁「キキクル」などを活用して災害情報を得る体験をしました。最後に地域住民の自助力を養うために、それぞれができることを話し合い、思いを共有しました。



【午後 講話・演習】



日本赤十字秋田短期大学の**及川 真一**氏が、「地域とのつながりを広げる防災の取組」と題して講話と演習を行いました。講話では、東日本大震災で被災した地域の写真を示し、「復興が（で）取り戻すべきものは何か？」と問いかけられ、参加者が意見交流しました。次に、及川氏自身の様々な災害ボランティア活動の経験から感じた、公民館が「災害の備えに関すること」や「住民のつながりを深めるための取組をすること」により、災害の教訓を次世代に伝えていくことの重要性を説かれました。さらに、防災を学ぶことに前向きになるために「難しい」から「楽しい」に変えることが大切であるという「新しい防災+@」について説かれ、人数が少なくても参加した方に楽しかったと感じてもらうことが大切であると強調されました。



最後に、災害ボランティアで利用している装備品を紹介されました。スコップやバール、チェーンソーなどボランティアとして実際に使用したものや、水のうなどの防災グッズを目の当たりにして、参加者はその有用性をあらためて認識していました。

【参加者アンケートより】（抜粋）

- ・ 防災は固定観念や正常性バイアスなどで、安全だと思われることが危険であることが理解できました。地域ができること、自分ができることを体験していくことが大事であることが分かり、周知していくことが大切であると思いました。
- ・ 災害は風化させないで次世代へ伝えていくことが「教訓を生かす」ことだと思います。参加人数が少なくても開催し、続けることに意味があるという防災対策の講座を通じ、災害時に強い備えを学ぶ機会を提供していきたいと思いました。